SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ライフ・イズ・ビューティフル

１９９９（平成１１）年7月２４日鑑賞

Data

監督：ロベルト・ベニーニ
出演：ロベルト・ベニーニ／ニコレッタ・ブラスキ／ジョルジオ・カンタリーニ

みどころ

ユダヤ人の迫害、強制収容所のお話し。「聖なる嘘つきーその名はジェイコブ」の兄弟版。「これはゲームだよ」と子供に嘘をついて収容所生活を生きのびようとするが・・・。見終われば、涙でグショグショになる秀作。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

＜ナチスの強制収容所＞

これは１９９９（平成１１）年１２月２９日に観た映画、「聖なる嘘つき――その名はジェイコブ――」のいわば兄弟版、姉妹編。絶対に涙を流さずには観られない映画である。

映画の始めは、ユダヤ系イタリア人のグイド（ロベルト・ベニーニ）が、ちょっと高嶺の花だと思える美しい女性ドーラに恋をする。そして、思いきって求婚。グイドはユダヤ系であってもイタリア人。とにかく、よくしゃべる。「うるさい奴だな」、「よくしゃべる奴だな」と思うが、意外（?）にも、ドーラは彼からの求婚を、スンナリと受け入れて結婚。そして、小さいながら、念願の本屋をもち、自立する。可愛い息子ジョズエにも恵まれ、グイドとドーラは幸せな家庭を築いていく。

まともな時代ならば、ユダヤ系であろうと、何系であろうと、普通の幸せな人生を歩むことができたはずの２人と息子ジョズエであった。しかし時代は・・・。次第にナチスドイツが台頭。ユダヤ人への迫害は、日に日に激しさを増していく。ユダヤ系のイタリア人が、まともに商売を営み、まともに生計をたてていること自体が、ナチス時代には、ひどく不愉快で、あってはならないこと、そんな異常な時代に突入していった。

「自分の城」である本屋に石を投げ入れられたり、玄関にペンキを塗られたり・・・。これらの迫害を我慢しながら、何とか明るく生きていこうとするグイド。そして、ユダヤ人迫害に憤りながらも、懸命に夫を支えていく妻のドーラ。しかし、時代はさらに悪化していった。ナチスドイツはついに、ユダヤ系イタリア人のグイドと、５歳になった息子ジョズエを強制収容所に連行するのである。

妻のドーラは、ユダヤ人ではないため、収容所送りはない。しかし、愛する夫と息子を収容所に送られたドーラは、自ら収容所行きの列車に乗り込み、男女別につくられた強制収容所に、別れて収容されてしまう。

＜悲しい嘘ー「これはゲームだよ」＞

５歳の息子ジョズエは、なぜ、今までのあたたかい家族や家を離れて、父親と一緒に、こんな寮みたいな所に住んでいるのか理解できない。グイドの毎日の労働のノルマは厳しく、また、ろくに食べるものもない。そして、いつガス室に送りこまれるかもわからない日々。この状況を、グイドはジョズエにどう説明したらいいのか。また、愛する妻のドーラも、女性用の収容所に入っていることはわかっていても、連絡をとることは、もちろんできない。

そこで、グイドはジョズエに対して、咄嗟に「自分達はゲームに参加しているんだ！」「隠れていると、点がもらえる。そして１０００点集めたら、戦車がもらえるんだ。だから絶対見つかったらダメだよ！」と、嘘をついた。これを信じた息子のジョズエ。その日以来、ジョズエにとって、強制収容所での生活は、死への恐怖とは縁遠い、点数獲得のための楽しいゲームとなった。

もちろん、「これはゲームだよ」というインチキ話を、５歳の息子に納得させ続けることは難しい。時にはこの嘘がバレそうな状況も迎える。しかし、父親のグイドは、持ち前のユーモア心をもって、懸命にゲームであることを演出。見事に、息子にゲームであることを納得させていく。

最初は、「おしゃべりの調子乗りのイタリア人め！」と思って見ていたが、ここまでストーリーが展開してくると、グイドの必死の「しゃべり」が、実にいじらしくなってくる。必死にしゃべりまくって、「ゲーム」の状況を説明するグイド。その悲しいほどにうまい話術によって、「何か怪しい」と思っていた息子も、妙に騙され納得させられていく。このしゃべりのテクニック・・・。明日もわからない命だということがひしひしと感じられるだけに、この嘘つきのテクニックには、涙が溢れてくる。そして遂に・・・。グイドとジョズエにも、ガス室行きの順番が・・・。

＜涙を誘うラストシーン＞

ナチスドイツの支配は、長く続くものではない。連合軍（解放軍）の反攻が進み、遂に、この収容所も連合軍の攻撃にあう。そこで、今までの支配者ナチスドイツは、機密文書を焼き払うとともに、収容したユダヤ人を全員射殺しようとする。そして、大混乱が・・・。

その混乱の中、グイドは必死に妻のドーラを捜す。息子ジョズエは、さすがに小回りがきき、身のこなしが素早いため、うまく物置の中に身をひそめることができた。しかし、グイドは・・・。ナチス兵に発見され、逃げ回るが、サーチライトに追い回され、遂にアウト。射殺されてしまう。連合軍の手によって、収容所は解放され、妻のドーラと息子のジョズエは無事救助されるが、グイドは帰らぬ人となった。しかし、ドーラとジョズエが生き残ることができたのは、グイドのこれほどまでの献身的な努力のおかげであった。

とにかく、涙なしには観ることはできない作品で、１９９８（平成１０）年のアカデミー賞作品賞にノミネートされた作品である。友人とケンカをしたり、家族のもめごとで悩んでいたり、あるいは人間不信に陥ったとき、１人でこういう映画を観て、おもいきり泣けば、人間の愛情とか信頼、そして家族愛の素晴らしさを再確認することができるのではないだろうか。そんな風に思わずにはいられない、「超お薦め」作品だ。

２００１（平成１３）年９月記